

主 題：イエス・キリストの復活

聖書箇所：マタイの福音書27章62節－28章10節

テーマ：イエス・キリストの復活を覚え、その歴史的事実に希望と感謝を持って歩むこと

イエス・キリストが死に勝利して3日目によみがえられたことを祝うこのイースター。今朝皆さんとともにいま一度考えたいことは、キリストの復活、特にその復活の揺るがない真実性についてです。

まず少し考えてみてください。もしイエス・キリストの復活がなかったとしたら、果たして今の私たちにどんな影響があるのでしょうか？もし復活が偽りだったとしたら、それぞれの人生にどんな影響があるのでしょうか？かつてパウロはその問いに対して1コリント15：17－19で「17 そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。……19 もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。」と明白に答えていました。もしキリストの復活がなかったなら、そこに罪の赦しや永遠の希望もなければ、私たちの信仰は全くもって無価値なものになり、私たちはこの世で最も哀れな存在だと。でもそのとおりです。もしキリストがよみがえっていなかったとしたら、クリスチャンはありもしないことを真実だと言って、それを信じて、そのうそのために自分の人生のすべてをささげて生きている者になるのです。そんな姿を周りの人たちが見れば、当然哀れな、愚かな人だと笑うでしょう。キリストの復活がなければ、今、私たちが信じていることも、今、私たちが希望を置いていることも、その歩みも何もかもが意味を失ってしまうのです。

あのマルティン・ルターも復活を指してこんなことばを残していました。「この信条（キリストの復活）を最も重要視している。もし復活がなかったら、私たちには慰めも希望もなく、キリストが為さった全てのことは無駄になってしまうからである。」と。今の私たちにとって、キリストの復活は絶対に欠かすことのできない重要な真理になります。もっと言えば、私たちの信仰は、この復活が実際に起こったという事実の上に成り立っているのです。では、イエス・キリストは本当によみがえったのでしょうか？もしかしたら、きょうこの中にいるある人たちは、キリストの復活に対して疑いを抱いているかもしれません。そんなことは絶対にあり得ないと考えているかもしれません。またある人は、キリストの復活が自分とどんな関係があるのかと思っているかもしれません。そんな人はぜひこれから見る聖書のみことばによく耳を傾けてください。

○キリストの復活を証明する七つの出来事：

今朝、私たちが学ぶみことばはイエス・キリストの復活に関する真理が記されたマタイ27：62－28：10です。そしてこの箇所を通して、キリストの復活を証明する七つの出来事について考えてみたいと思います。このみことばが皆さんの心に、キリストの復活は確かに起こったのだという喜びと確信を、そしてまた神様への感謝を生み出すことの助けになることを心から祈っています。

では、いつものように、まずみことばをお読みします。

マタイ27：62－28：10

「:62 さて、次の日、すなわち備えの日の翌日、祭司長、パリサイ人たちはピラトのところに集まって、:63 こう言った。「閣下。あの、人をだます男がまだ生きていたとき、『自分は三日の後によみがえる』と言っていたのを思い出しました。:64 ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと、弟子たちが来て、彼を盗み出して、『死人の中からよみがえった』と民衆に言うかもしれません。そうなると、この惑わしのほうが、前の場合より、もっとひどいことになります。」:65 ピラトは「番兵を出してやるから、行ってできるだけだけの番をさせるがよい」と彼らに言った。:66 そこで、彼らは行っ

て、石に封印をし、番兵が墓の番をした。28:1 さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。:2 すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。:3 その顔は、いなずまのように輝き、その衣は雪のように白かった。:4 番兵たちは、御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。:5 すると、御使いは女たちに言った。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。:6 ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらん下さい。:7 ですから急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせなさい。イエスが死人の中からよみがえられたこと、そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれ、あなたがたは、そこで、お会いできるということです。では、これだけはお伝えしました。」:8 そこで、彼女たちは、恐ろしくはあったが大喜びで、急いで墓を離れ、弟子たちに知らせに走って行った。:9 すると、イエスが彼女たちに会って、「おはよう」と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエスを拝んだ。:10 すると、イエスは言われた。「恐れてはいけません。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです。」

1. ユダヤ人指導者たちの立てた策略 27:62-65

さて、キリストの復活を証明する一つ目の出来事として挙げられているのは、ユダヤ人指導者たちの立てた策略です。イエス様が生きている間、彼のことを憎み、十字架につけて殺した祭司長やパリサイ人たちは、死後もその影響が広まらないようにと策を練っていました。しかし、皮肉にもそれがキリストの復活を証明することにつながっていくのです。

まず、62節「さて、次の日、すなわち備えの日の翌日、祭司長、パリサイ人たちはピラトのところに集まって、」と始まっていました。この場面を少し想像してみてください。祭司長とパリサイ人たちは、キリストが十字架につけられた金曜日の次の日、つまりユダヤ人たちにとって安息日とされていた土曜日に、ピラトのもとに集っていました。ここで「備えの日の翌日」という言い回しが使われていましたけれども、同じことです。ユダヤ人たちは律法によって、安息日には何もすることができませんでした。だからこそ、食事の用意を含めてすべてのことを備える備えの日、つまり金曜日に終わらせている必要があったのです。しかし、ユダヤ人指導者たちは非常に大きな懸念事項を抱えていたがゆえに、そんな安息日である土曜日にピラトの官邸へとみずからやって来るのです。これを聞いても、私たちは余り何も思わないかもしれませんが、これはあり得ないことでした。なぜなら彼らは、この日の前日にも捕えたイエス様をピラトのところへと連れて行っていたのですけれども、その時にはこんな態度をとっていました。ヨハネ18:28-29にこう記されています。「:28 さて、彼らはイエスを、カヤパのところから総督官邸に連れて行った。時は明け方であった。彼らは、過越の食事が食べられなくなるのないように、汚れを受けまいとして、官邸に入らなかった。:29 そこで、ピラトは彼らのところに出て来て言った。」とあります。ユダヤ人である彼らは、安息日を前にして自分たちが汚れを受けないために異邦人の総督であるピラトの官邸に入ろうとはしなかったのです。彼らが中に入って来ないので、ピラトが彼らのもとに出て来る必要がありました。そんな彼らがここではみずから官邸にやって来て、ピラトのもとに集まっていたのです。以前、イエス様に向かって安息日を破っていると何度も非難していた祭司長やパリサイ人たちが汚れることをいとわずに、安息日の律法さえ破ってそこに集まっていたのです。

では、なぜ彼らはそんなことをしたのでしょうか？それはそれだけの危険を犯したとしても、ある大きな懸念を晴らさなければいけないと彼らが考えていたからでした。63-64節を見ると、「:63 こう言った。「閣下。あの、人をだます男がまだ生きていたとき、『自分は三日の後によみがえる』と言っていたのを思い出しました。:64 ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと、弟子たちが来て、彼を盗み出して、『死人の中からよみがえった』と民衆に言うかもしれません。そうなると、この惑わしのほうが、前の場合より、もっとひどいこととなります。」と書いてあります。彼らが抱えていた懸念

は、イエス・キリストが3日後に復活するということでした。もちろん彼らはそのことを信じていたのではありません。ましてやイエス様のことを心底忌み嫌っていた彼らは、死んだ後も名前ではなくて、「あの、人をだます男」と呼んでいました。しかし、このユダヤ人指導者たちは、イエス様が地上で働かされている間、口にしていたそのことばをよく覚えていたのです。実際、イエス様はある時、律法学者やパリサイ人たちに向かって、マタイ12:38-40で「:38 そのとき、律法学者、パリサイ人たちのうちのある者がイエスに答えて言った。「先生。私たちは、あなたからしるしを見せていただきたいのです。」:39 しかし、イエスは答えて言われた。「悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。だが預言者ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられません。:40 ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいましたが、同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。」と述べていました。このことばを耳にした時、旧約聖書をよく知っていた彼らは、イエス様が何を言わんとしているのかがすぐわかりました。ヨナが三日三晩、魚の腹の中にいて、そこから出て来たのと同じように、イエス様も死んで葬られた後、3日目によみがえると主張していると、彼らはすぐに気づいたのです。間違いなく、彼らはそのキリストのことばを信じてはいませんでした。実際に復活が起こることは到底考えてもいませんでした。でも、だからこそ、彼らは自分たちと同じように、ほかの人々にもキリストの復活を信じてほしくはなかったのです。万が一にも町の人々がキリストは復活したという知らせを耳にして、希望にあふれて弟子たちと一緒にあって、そのメッセージを語り回すようなことは絶対にあってはならないと恐れていたのです。

ここで少し頭の中に入れておいてほしいことが二つあります。一つは、彼らがこんなことばを話していた時、祭司長やパリサイ人たちは、イエス様が本当に死んだこと、そしてそのからだがこの墓に葬られているのかをちゃんと把握していたということです。彼らはどこにその死体が葬られているのかわかっていました。そしてもう一つは、彼らは弟子たちがやって来てそのからだを盗み出し、イエス様は死人の中からよみがえったと民衆に言いふらすと信じていたということです。

でも少し考えてみれば、これほど皮肉なこともありませんでした。それは、私たちが福音書に登場する弟子たちの姿を覚える時に、彼らこそイエス様が何度も何度も自分は3日後に復活すると言われていたにもかかわらず、そのことばを信じていなかったのです。例えば、マタイ17:22-23で、「:22 彼らがガリラヤに集まっていたとき、イエスは彼らに言われた。「人の子は、いまに人々の手に渡されます。:23 そして彼らに殺されるが、三日目によみがえります。」」と言われます。その後、弟子たちはどんな反応をします？「すると、**彼らは非常に悲しんだ。**」とあります。彼らはイエス様が殺されて終わりだと思っていました。復活することはないと思っていたから悲しんでいました。また、もっと言えば、空っぽになった墓を実際に見た女性たちが弟子たちのところに戻って来てそれを報告した時の彼らの様子も、ルカ24:11に「ところが使徒たちにはこの話はたわごとと思われたので、彼らは女たちを信用しなかった。」と記されています。弟子たちにとって、イエス様の復活は「たわごと」——ばかげた話でした。復活することなどみじんも期待していなかった彼らの頭には、そのからだを盗み出すという発想は到底なかったのです。むしろ十字架につけられて殺された自分たちの師、イエス様の姿を見た彼らは、次は自分たちのいのちがねられると恐れて、エルサレムのどこかの部屋で戸を閉めて隠れていました。だから弟子たちがそのからだを盗み出すというのは考えられないことだったのですが、祭司長やパリサイ人たちはどんな形でもイエス・キリストの復活の知らせが人々の間に伝わる可能性を排除するために、墓を兵士たちに守らせてくださいとピラトにお願いしていたのです。

その申し出に対して、ピラトは65節で「ピラトは「番兵を出してやるから、行っただけの番をさせるがよい」と彼らに言った。」と答えていました。彼らの願いを聞き入れたピラトは、墓を守らせるためにローマの兵士たちを彼らに与えてやりました。ちなみに、この当時、ローマ兵の一団というのは、4人一組の兵士4組、つまり16名の熟練した兵士によって構成されていました。そして、4名の兵士が監視している間、ほかの12名は休むといった形で、必ずどんな時も墓にだれかがやって来ないかを

交代で警戒していたのです。また、このローマ兵たちは、決して失敗が許されませんでした。もし託された義務を果たすことができなければ、彼らは自分のいのちに危険が及ぶことをよくわかっていました。だとすれば、だれかがもしイエス様のからだを盗もうとするのであれば、休んでいる兵士たちを起こさずに近づいて来て、自分のいのちがかかっている中、必死に番をしている兵士たちの目をどうにかしてやり過ごして、墓をふさいでいた巨大な石を彼らに気づかれないようにどかして中に入って、からだを取ってばれないように逃げなければいけなかったのです。そんなこと可能だと思います？絶対に不可能でした。イエス様のからだが入れられた墓は、こうしてだれも外から入って中の物を盗み出すことができないように守られていたのです。これがユダヤ人指導者たちの立てた策略でした。

2. 封印された墓 27:66

次にキリストの復活を証明する二つ目の出来事として挙げられるのは、封印された墓です。続く66節に「そこで、彼らは行って、石に封印をし、番兵が墓の番をした。」と記されています。イエス様の葬られた墓は今見てきたように、もう十分過ぎるほど厳重に守られていました。しかし、彼らはそれだけで満足せず、それに加えて石に封印を施したのです。この封印というのは、恐らく柔らかい粘土、もしくはろうのようなもので、墓の入口の壁とその入り口に置かれた石とをつなぎ合わせるようにして塗られていました。それをもってこの墓がローマ皇帝の保護下にあることを象徴していたのです。そしてこの封印は、私たちに重要な二つのことを教えてくれています。一つは兵士たちが封印をして守っている墓が確かにイエス様が入れられた墓だということです。考えてみてください。もし彼らがだれか間違っただけの墓や空っぽの墓に封印をしていたとしたら、それは笑いものになっていたでしょう。彼らは自分たちが守っている墓が、確実に葬られたイエス様のからだが入れているものだとなっていたのです。また、二つ目に封印がなされているというのは、墓泥棒に対する警告でもありました。当時、だれでも封印のされている墓に手を出すというのは、ローマ皇帝に対して挑戦することを意味していたのです。だからこそ、この墓の石を勝手に動かせるような人はいませんでした。この墓は兵士たちの力だけでなく、法律の力によっても守られていました。

こうしてユダヤ人指導者たちは、ありとあらゆる手段を用いてキリストの墓を守ろうとしました。弟子たちを含め、だれも墓からイエス様のからだを取り出すことができないようにと、彼ら自身がその可能性をすべて取り除いたのです。実際に墓の守りはもう人の力でどうすることもできないほど厳重なものになっていました。我々にできることはもうすべてやった、これで絶対に大丈夫だと彼らは思ったことでしょう。3日後、墓の中にそのままになっているイエス様のからだをさらして、人をだますあの男がまさにそのとおりのうそつきだったと、人々に知らしめてやろうと。しかし、そんな彼らの行為は、3日後にイエス様がよみがえって墓が空っぽになったことが、だれかにかつてからだを奪われたからではなく、確かに復活されたことを裏づける証明にしかならなかったのです。

3. 空っぽの墓を目撃した女性たち 28:1

三つ目にキリストの復活を証明する出来事として挙げられるものは、空っぽの墓を目撃した女性たちの存在です。28:1に「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。」と記されていました。場面は移り変わって、週の初めの日、つまり、日曜日の明け方になりました。「マグダラのマリヤと、ほかのマリヤ」、このマリヤはヤコブとヨセフの母ですが、ふたりはイエス様の墓を見にやって来たのです。ここには記されていませんけれども、ほかの福音書を見ると、このふたり以外にもサロメやヨハンナという女性たちも一緒にいたことがわかります。イエス様が復活しているとは夢にも思っていなかった彼女たちは、亡くなっているイエス様のからだに塗ろうと準備していた香料を持って、早朝に墓のところにやって来るのです。

ここで注目してほしいことがあります。それは、この福音書を記したマタイは特にこのふたりの女性——マグダラのマリヤとヤコブとヨセフの母であるほかのマリヤの姿を、キリストの十字架、埋葬、そ

して復活という重要な場面すべてに記していたということです。27:55-56に「:55 そこには、遠くからながめている女たちがたくさんいた。イエスに仕えてガリラヤからついて来た女たちであった。:56 その中に、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、ゼベダイの子らの母がいた。」と書いていました。ここにはイエス・キリストが十字架にかかって死なれた場面が書かれていました。はっきりとそこにふたりの姿が記されていました。ふたりはキリストが十字架の上で死なれた様子を目にしていたのです。でも、それだけではありません。少し先の60-61節を見てください。「:60 岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。墓の入口には大きな石をころがしかけて帰った。:61 そこにはマグダラのマリヤとほかのマリヤとが墓のほうを向いてすわっていた。」と書いてありました。ここにはイエス様のなきがらが墓に葬られる場面が記されています。ここにもふたりの姿が記されていました。ふたりは亡くなったキリストのからだに墓に葬られる様子も目にしていました。そしてそれらに加えて28章でも、ふたりは真っ先に空っぽになったキリストの墓を目にしていたのです。この女性たちはイエス様の死、埋葬、復活という三つの重要な場面すべてを目撃した人物でした。もっと言えば、彼女たちだけがこれらすべての場面を目にした者でもありました。

例えば、イエス様の弟子であったヨハネも十字架の上で亡くなられているイエス様の姿や、空になった墓、復活されたイエス様の姿を目にしていました。でも彼は墓に葬られている場面にはいませんでした。この女性たちだけがそれら三つの場面すべてを実際に目撃した歴史の証人だったのです。これを聞いてある人は、女性たちが目撃者だったのですね、それがどうしたのですか、次、行きましようと思いかもしれません。でも、これもこの当時の歴史的、文化的な背景を考えてみれば、非常に不思議なことだったのです。この男性が権力を握っていた1世紀の社会において、一般的に女性の証言というものは信用できないものとして扱われていました。だから、もしだれかが法廷に呼び出されることがあって、自分を弁護してくれる証人を必要とすることがあれば、女性ではなく男性を連れて行こうとしました。もちろん今とは違いますけれども、それが当時の現実でした。女性の証言が信頼できないものとして扱われていて、男性の証言の方が、この時代においては世間一般的に優先されていたのです。そんな時代に、ここでは女性たちが福音書の著者によって、重要な場面の最初の目撃者として、あかし人として描かれていたのです。一体どうしてだと思いませんか？もちろんそれにも理由はありました。もしマタイがキリストが復活したという話を単にでっち上げていたのだとしたら、女性の証言など絶対に使いませんでした。なぜなら作り話のために、当時社会で信用されていなかった女性の証言を用いるのであれば、だれもそんな話に耳を傾けようとはしなかったでしょう。でもマタイはここで女性を目撃者として用いるのです。つまりキリストが十字架にかかって死に、墓に葬られ、復活されたという話が疑いようのない事実だったからこそ、著者はそのままその場にいた女性を歴史の証人として描いていました。そしてこれが三つ目の出来事でした。

4. 超自然的な出来事 28:2-4

四つ目にキリストの復活を証明する出来事として挙げられるものは、超自然的な出来事の存在です。2-4節に「:2 すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。:3 その顔は、いなずまのように輝き、その衣は雪のように白かった。:4 番兵たちは、御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。」と記されていました。この場面は一見マリヤたちが到着してからの出来事のように思えるかもしれませんが、ほかの福音書からも明らかのように、彼女たちが到着する前のどこかのタイミングで起こっていました。天から御使いが降りて来て、大きな地震が起こり、墓をふさいでいた巨大な石はわきへころがされるのです。そしてその上に御使いはすわっていました。もちろんここで墓をふさいでいた石を御使いが取り除いたのは、墓の中のイエス様を外に出すためではありませんでした。イエス様は別に日曜日の朝、死からよみがって墓の中で入り口の石がどかされるのを今か今かと待っていたのではありません。早く御使いがやって来な

いかな、外に出て弟子たちに会いたいから早く石を取りのけてくれないかななどと願っていたわけはありません。もっと言えば、イエス様は既にその墓の中にはおられませんでした。栄光のからだを持って堅く扉を閉めていた弟子たちのもとに現れることのできたおかたは、当然、墓の石であろうが何だろうが通り抜けることができました。ですからイエス様が外に出るのを助けるために、御使いは墓の石をわきへところがしたではありません。では、何のためだったか？それは目撃者となる女性や弟子たちを墓の中に入れるためだったのです。

思い返してみれば、この場面に見られた「大きな地震」というのは、ここ以外、イエス様が十字架の上で亡くなった時にも起こっていました。マタイ 27 : 51 に「すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。」とありました。つまり、超自然的な巨大な地震はイエス様の死と復活、そのどちらの場面でも起こっていました。父なる神様は、この二つの重大な出来事に対する応答として、地を揺れ動かされていたのです。そして、このことを通して、ほかのだれでもないご自身が、その背後に働かれていることを明白に証明されました。

また、この場にいた兵士たちの様子が 4 節に「番兵たちは、御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。」と描かれていました。彼らは激しく地が揺れ動くのを感じ、いなずまのように輝き、その衣が雪のように白い御使いの姿を目の当たりにしました。その光り輝く御使いが巨大な石をわきへ転がし、その上にすわる姿を目撃したのです。そんな彼らは「恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになっ」ていたのです。興味深いことに、ここで用いられていた「震え上がり」という動詞は、この 28 : 2 に出てきていた「地震」と同じ語源を持つことばが使われていました。つまり、その場面を目撃した兵士たちは、外側において地震を感じただけでなく、うちにもそのあまりの衝撃によって地震が生じていたのです。彼らは恐れに支配されていました。話すことも動くこともできなければ、立っていることすらできませんでした。膝をついて倒れることなど決してないようにと訓練され続けてきた熟練の屈強な兵士たちが、まるで死人のようになって、身動きすることができずにその場に倒れていたのです。どんなに力を持った人間も、全能の神様の前にはなすすべなどありませんでした。

ドナルドハグナーのという神学者は、この場面を表わすのにぴったりのことばを残しています。「死者の警護を任された者自身が死んでいるように見え、その死者が生かされているという皮肉を見逃してはいけぬ。」と。まさにそのとおり、死んだ者を守っていた兵士たちが死んだようになり、死んでいたイエス様がよみがえって生きておられるのです。こうして神様は超自然的な出来事を通して、イエス様の死だけでなく、ご自身が復活のうちに働かれたことを明らかにされていたのです。

5. 空っぽだった墓 28 : 5 - 6

五つ目に、キリストの復活を証明する出来事として挙げられるものは空っぽだった墓の存在です。5 - 6 節に「:5 すると、御使いは女たちに言った。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。:6 ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらん下さい。」と述べられていました。場面は再び女性たちの姿に戻りました。早朝、墓に到着した彼女たちは、そこで墓の石が横にどかされている光景を見るのです。彼女たちがそこで死んだようになっている兵士たちを目撃したのかどうかはわかりません。でも、墓の石が取り除かれているのを見た彼女たちは、その中へと入って行くのです。そしてそこにイエス様のからだがないことを目にしました。ルカはその時の光景をわかりやすく、こう記しています。ルカ 24 : 2 - 3 で「:2 見ると、石が墓からわきにころがしてあった。:3 入って見ると、主イエスのからだはなかった。」と。想像してみてください。キリストの復活を信じていなかった彼女たちが墓の中に入って、そこからだがないのを見たのです。間違いなく彼女たちは驚いて、その中を必死に探し回っていたでしょう。混乱を覚えていたでしょう。

するとそんな彼女たちの前に御使いが現れて言うのです。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。:6 ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらんください。」、御使いはなぜそこからだがないのかを彼女たちに説明しました。それはイエス様がよみがえられたからでした。前から言われていたように、このかたが死からよみがえられたからでした。イエス様はご自分が死んだ後どうなるかを、生きていた時にはっきりとわかっておられたからこそ、何度も何度も弟子たちに告げていたのです。マタイ16:21に「その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。」、マタイ20:18-19にも、「:18 「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。:19 そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」」とあります。イエス様はご自分がどうなるかをよくわかっていたので、そのことばを何度も何度も口にされていたのです。そしてそのことばどおりにイエス様は3日目に死からよみがえられました。「ここにはおられません。……来て、納めてあった場所を見てごらんください。」、御使いたちはそのように言って、墓の中が確かに空っぽだということを女性たちに示していました。

ここで少し考えてみてください。もし当時のユダヤ人指導者たちやほかのだれかが、キリストへの信仰や希望を本気で滅ぼそうとしていたのであれば——実際に彼らはしていたのですけれども——、彼らはたった一つのことをすればよかったのです。それは墓に葬られてそのままになっているイエス様のからだを人々に見せることでした。そうすれば、人々はこのかたが神の御子でも救い主でもない、ただの人間だったと認めたのです。でも、キリストのからだはそこにはなかったから、それはかなわなかったのです。そしてそのことをイエス様を憎んでいた祭司長たちも後に認めていました。彼らは28:13で「こう言った。「『夜、私たちが眠っている間に、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った』』と言うのだ。」、15節で「それで、この話が広くユダヤ人の間に広まって今日に及んでいる。」と述べるのです。イエス様の敵たちでさえ、キリストのからだは墓からなくなっているということをわかっていました。でも、どうにかしてその真実が広まらないようにと、彼ら自身がその可能性をすべて排除したにもかかわらず、弟子たちが盗んで行ったと言いなさい、そんなうわさを流すようにしたのです。聖書だけではなく、2世紀に書かれた書物の中にも、ユダヤ人たちがイエスの弟子たちがキリストのからだを盗んでいったと言っている姿を見て取ることができます。そのような歴史があるのです。当時の人々の間には、このうわさを信じた者たちがいました。でも、キリストの入れられていた墓が今は空っぽになっていて、そこに入れられていたイエス様のからだはなくなっているということを彼らもわかっていたのです。そして今もなお空っぽのままの墓の存在がキリストの復活を証明する五つ目の出来事でした。

6. 復活したイエス様を目撃した弟子たち 28:7

六つ目に、キリストの復活を証明する出来事として挙げられるものは、復活したイエス様を目撃した弟子たちの存在です。7節に「ですから急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせなさい。イエスが死人の中からよみがえられたこと、そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれ、あなたがたは、そこで、お会いできるということです。では、これだけはお伝えしました。」「と述べられていました。マグダラのマリヤたちの前に現れてキリストの復活を伝えた御使いは、大至急この事実を弟子たちにも知らせなさいと彼女たちに命じていました。ここで皆さんに気づいてほしいのは、御使いは弟子たちのことを、前に弟子たちだった者とか、かつては従っていたけれども裏切った者とか、そんなふうには言っていなかったということです。弟子たちはイエス様が最も必要な時に裏切って、恐れを抱いて逃げ出しました。イエス様を見捨てたのです。それでもなお彼らは変わらずイエス様の弟子でした。この後見ますけれども、1

0節でイエス様自身も「恐れてはいけません。行って、わたしの兄弟たちに」と言われていました。イエス様の弟子たちに対する愛は変わることはありませんでした。

さて、また場面を戻して、御使いたちからその命令を聞いた彼女たちは、そのことばどおりにイエス様が死人の中からよみがえられたこと、またガリラヤで彼らとお会いになることを弟子たちに伝えました。その後、どうなったかというところ、ここで約束されていたことは、まさにそのとおりに起こるのです。復活されたイエス様は確かに、弟子たちの前にお現れになりました。この続きの28：16-17にも「：16 しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行って、イエスの指示された山に登った。：17 そして、イエスにお会いしたとき、」と書いていました。彼らは会いました。裏切ったイスカリオテのユダを除く十一人の弟子たちに加えて、パウロがコリントにも記していたように、500人以上もの弟子たちがよみがえったキリストの姿を天に上るまでの40日の間に目の当たりにするのです。また、その40日の間に、ガリラヤだけでなく、ほかの場所でもイエス様は弟子たちにお会いになられていました。

例えば、イエス様が復活されたまさにその日の夕方、敵を恐れて部屋に閉じこもっていた十人の弟子たちの前にイエス様は現れて、こう言われていました。ヨハネ20：19に「：19 その日、すなわち週の初めの日の夕方のものであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」」と。また、その8日後にも、前回いなかったトマスも含めて十一人すべての弟子たちの前にイエス様は現れ、同じことばを彼らにかけられていました。ヨハネ20：26に「八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように」と言われた。」と。こうして復活されたイエス様は500人以上もの弟子たちの前にお現れになりました。そしてそれを通して、ご自身が確かに死に勝利してよみがえられたこと、それが歴史的事実であると明らかにしたのです。

7. 復活したイエス様によって心が変わった人たち 28：8-10

そして最後、キリストの復活を証明する出来事として七つ目に挙げられるものは、復活したイエス様によって心が変わった人たちの存在でした。8-10節に「：8 そこで、彼女たちは、恐ろしくはあったが大喜びで、急いで墓を離れ、弟子たちに知らせに走って行った。：9 すると、イエスが彼女たちに出会って、「おはよう」と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエスを拜んだ。：10 すると、イエスは言われた。「恐れてはいけません。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです。」と述べられています。思い返してみてください。香料を持って墓にやって来た女性たちは、初め悲しみでいっぱいでした。自分たちが心から愛していた主が死んでしまったことに対して、心が沈み嘆いていたのです。しかし、そんな彼女たちは空っぽになった墓や御使いを目の当たりにしました。もちろん彼女たちは当然のように恐れを抱きました。でもそれで終わりではなかったのです。彼女たちはただ恐れを抱いただけではなく、その心には喜びが満ちあふれていました。彼女たちは大喜びで弟子たちのところへ急いで走って向かうのです。

ここで「大喜び」と訳されている表現は非常に興味深くて、新約聖書の中で6回登場して、そのうちの4回がイエス様の復活と誕生の知らせに対して使われています。例えば、マタイ2：10ではイエス様の誕生を示す星を見た東方の博士たちの様子が「その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。」と記されておりました。つまり彼女たちの心のうちにあったのは、単なる喜びではなくて、ずっと待ち続けていた救い主の誕生を今まさに目撃した博士たちが持っていた喜び、言い表すことのできないような最高の喜びに満ちあふれていたということです。そしてそんな女性たちは弟子たちのもとへと向かって行く道中であって、よみがえったイエス様と実際にお会いするのです。その時、彼女たちはそのかたが自分たちが心の底から愛していたイエス様だと気づくと、真っ先にその前にひれ伏して拜んだのです。彼女たちの心は変えられました。復活を信じていなかった心には悲しみがありました。しかし、キリストの復活

を信じた心には大きな喜びがあったのです。そしてこれは自分たちの身の危険を覚えて敵を恐れて部屋に隠れていた十一人の弟子たちも同じでした。彼らのもとに現れたイエス様が、ご自身の手と脇腹を示された時の彼らの様子が、ヨハネ 20 : 20 に「こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。」と描かれています。心から慕っていたイエス様が十字架につけられ、死んだことで恐れや失望を覚えていた弟子たち、復活など絶対にないと信じることができなかった弟子たち。彼らはイエス様の復活については何度も聞いていたけれども、それを信じられなかったからこそ、いろいろなものに対して恐れや不安を抱いていたのです。しかし、そんな彼らも死からよみがえられたキリストの姿を目撃した時に、このかたの愛に触れた時に、その心は変えられ、彼らの生き方が変えられました。彼らがその後、どんなふうに進んだのかは皆さんがよくご存じです。

彼らは自分たちが目撃したキリストの死と復活の知らせを、その生涯をかけて人々の前で大胆に宣べ伝えていました。からだは、以前恐れていたユダヤ人たちに捕えられることもあり、むち打たれて、牢に入れられることもあり、ひどい苦しみを味わって、最後には処刑された者たちもいました。でも、どんなに激しい苦痛を味わうことがあったとしても、彼らは二度とキリストの死と復活に対する信仰を否定することはなかったのです。文字どおり彼らは自分のいのちをかけてすばらしい知らせを人々に語り続けていました。かつてあんなにも恐れていた彼らが大胆に喜んで、どんな時も自分のすべてを犠牲にしてキリストの復活を宣べ伝え続けていたのはなぜだと思います？それは自分たちの愛するイエス様が確かに死に勝利して、3日後に復活されたと知っていたからです。偽りや作り話のためにいのちを捨てようと言う者はひとりとしていません。キリストの復活がもしうそだったら、彼らはどこかで失望を覚えて、その働きをやめていたでしょう。しかし、キリストの墓が空っぽであったことが揺るがぬ真実であったからこそ、彼らは自分のいのちさえ惜しむことなくささげていたのです。死からよみがえったイエス様によって心が変わられた人たちの存在が、キリストの復活を証明する七つ目の出来事でした。

〇まとめ

さて、これまで七つの出来事を通して、キリストの復活が実際に起こった疑いのようなない事実なのだというのを見てきました。では最後に、その真理から私たちそれぞれに何が言えるのでしょうか？もちろん、いろいろなことを挙げることはできますが、大きく二つのことが言えます。

一つ目はすべての人間が必ずさばかれるということです。キリストの復活は、例外なくすべての人が死後さばきを受けることを明らかにしました。どういうことかということ、パウロは使徒 17 : 30 - 31 でこのように述べていました。「:30 神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。:31 なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。」、ここに記されていたことは非常に明白でした。神様はすべての人に対して悔い改めなさいと求めていたのです。なぜか？それは、この世界をさばくために、その日を既に決めておられるからでした。この世界を創造された聖く正しい神様は、どんな罪も見逃されることはありません。すべての悪に対して今もなお怒りを燃やし続けられているのです。だからもし今、この中にまだ自分の罪を悔い改めずに、神様に逆らって自分の望むままだを生きている方がいるのであれば、そんなあなたに神様は悔い改めなさいと命じているのです。でもある人は、神様が本当にさばきを与えるか、だれにもわからないでしょうと言うかもしれません。そもそも神様がいるかもわからないでしょうと。別に自分の好き勝手に生きて問題ないでしょうと。でもそうではないのです。なぜなら、31節の続きに「そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。」と書いていました。どうして神様のさばきが必ずあると言えるのでしょうか？それはそのかた、イエス・キリストを死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証を神様が与えたからです。

きょう見てきたように、キリストは確かに復活されました。だからこそ、神様は必ずご自身の完全な正しさをもって、すべての人を公正にさばかれるのです。そのキリストの復活が絶対にあるということを見せてくれています。でもそれだけではありません。二つ目に言えるのは、このキリストのうちにのみ罪からの救い、永遠のいのちの希望があるということです。感謝なことに神様ご自身の愛によって、私たちのような罪人のために救い主イエス・キリストを送って下さいました。本来であれば、罪ゆえに私たちこそがさばかれるべきだったにも関わらず、このかたが身代わりとなってその血を流し、罪の代価のすべてを支払って下さったのです。それが金曜日にイエス様が十字架の上でなされたことでした。神の御子が私たちのためにそのいのちをささげて下さったのです。パウロはこんなことばを残しています。ローマ4：25に「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」と。イエス様は私たちの罪のために死なれ、墓に葬られました。しかし、そこから3日目によみがえることを通して、救いの御業のすべてを成し遂げられたことの証明をされたのです。キリストは確かに復活されました。だからこそこのかたのうちにのみ救いがあります。

ですから、もしまだ自分の罪を悔い改めずに神様に逆らい、よみがえられたキリストを自分の救い主として信じていない方がいるのであれば、きょう一緒に見てきたこのみことばを自分のこととしてよく考えてください。さばきの日——あなたが神様の前に立つ日はいつの日か必ずやって来ます。イエス・キリストが復活されたからです。ですから、まだ時間が残されている今、きょうというこの日に、自分の罪を悔い改めて、このイエス・キリストを自分の救い主として信じ、受け入れてください。

兄弟姉妹の皆さん、キリストの復活、この事実の上に私たちの信仰は成り立っています。もしこの事実が偽りで、キリストが今もなお墓の中にとどまったままだとすれば、私たちの信仰は全くもって空しいものになりました。罪の赦しがなければ、その罪の中に死んでいたのです。しかし、このかたは3日目によみがえられました。ユダヤ人指導者たちが、ローマの兵士たちがあらゆる手段を尽くして、そのからだを墓の中に閉じこめたままにしようとしてしました。でも神の御子であるイエス様をそこにとどめることなど到底できるはずもありませんでした。このかたはあらゆる人の策略、また何より罪や死の力さえも打ち破って偉大な勝利者として、今も生きておられるのです。だからこそ私たちは、この方においてすべての罪が完全に赦されていると確信を持つことができます。だからこそ私たちの信仰は、決してむだにはならないと確信することができます。そしていつの日かこの主と同じようによみがえって、主とともに永遠を天で過ごすことができるという揺るがぬ希望を持って生きていくことができるのです。それはイエス・キリストがよみがえられたからです。「ここにはおられません。……よみがえられたからです。」、確かにキリストはよみがえられました。このかたが私たちとともにいて下さるのです。すばらしいことだと思いませんか？この主を覚えて、喜びと感謝をもってともに主に忠実に歩み続けていきましょう。